

思
考
の
隅
景

「こうやま・ろくろう」という語源学者あるいは言語学者を、ご存知だろうか。日本の言語学界では、おそらく知る人など、極少数だろう。香山六郎（1886-1976）と漢字で綴るこの人物は、ブラジルの日系移民として長い生涯を終えている。移民研究の分野を除けば無名に近いが、その思想は日本人の植民地体験を世界史的に考えるうえで無視できない。

香山は、南米大陸ブラジルの少数民族であるトゥピの言語と日本語とが共通の起源を持つという、一見して突拍子もない仮説を展開した人物だった。トゥピ語で「行こう」と聞こえた言葉は、そのまま日本語の「行こう」を意味していた。この偶然とも見える出会いが、香山をして後半生を賭けた探索へと誘った。香山の語源説明によれば、トゥピ語の*ikó*は、苦勞の末に発見した水を見ての歡喜に由来するという。この逸話を伝える細川周平は、そこにヘレン・ケラーが冷たい液体をwaterと認知した瞬間の体験を重ねあわす。キリスト教の賛美歌に親しんだ人ならば、咄嗟に*vidi acquam*、すなわち「吾水を見出せり」を思い出すかもしれない。香山が「発見」した音声学的語源には、カトリック（すなわち普遍的）な言語体験を想起させるだけの根源性が秘められていたことになる。

こうして、最初は単なる偶然の一致と見えた発見は、香山の頭脳のみならず、強固な確信へと変貌を遂げて

香山六郎 トゥピ=日本語共通語源説幻想の人類史的な価値

連載
95
ある
日系
ブラジル人の
思索
普遍言語の希望に夢を託した、

国際日本文化研究センター
総合研究センター1 研究員
稲賀繁美

ゆく。ブラジルと日本とは、そのあいだに横たわるポリネシア言語を仲立ちとして、太平洋を横断する。この跨太平洋的ヴィジョンに加えて、香山はトゥピ語の発音は、同根の日本語語彙の語源を解く鍵であるとの信念をも深めてゆく。例えば榎原神宮の*kashihara*は、トゥピ語で「過去」を意味する語彙と重なる。さらに香山のトゥピ語一音節・一語義仮説に基づけば、この語彙は*ko*（持ち支える）*shi*（光）*ara*（太陽）に分解することができ、したがって実は、ほかならぬ太陽神アマテラスを指していることが、トゥピ語の語源より解明される、というのである。なぜ*kashihara*が*koshiara*となるかに関しては、現在のポルトガル語発音による汚染を除去した原トゥピ語発音の復元、という香山のもうひとつの仮説が動員される。このようにトゥピ=日本語語彙集（1951）から語源解明（1970）、さらに発音と語義との関連解明（1973）を経て、晩年の香山は画期的な結論に到達する。即ちトゥピ語を通じて、古代日本語の考古学的な原義が特定され、その発音を通して日本人の言語的な価値観を、存在論的に理解することが可能となる。

あきらかに常軌を逸し、国粹主義的であり、また専門的な言語学的訓練とは無縁の香山の思弁を、荒唐無稽と嗤うことは容易いだろう。だがそこには日系ブラジル移民が置かれた社会的立場や、かれらがブラジルにかけた夢が透視される。

実際、トゥピ語と日本語の同系説が成立するならば、それは日系人がブラジルに移住することを、言語学的に正当化すること。社会的に周辺的な少数者であった日本人社会は、ブラジル土着文化の正統な継承者の地位を獲得し、その社会的な階層的な地位を象徴的に向上させよう。また少数言語たるトゥピ語も、その国家語としての由緒正しさを主張しようこととなるだろう。

トゥピ=日本語同系仮説は、ブラジル社会の既成秩序に対する叛逆ではなく、むしろその国家理念を補強し、そこに日本人移民を溶け込ます、調停の物語を提供する。実際、香山にとっては、ブラジルとは世界の移民を差別なく受け入れるという、人類普遍の理想を具現する約束の土地でなければならなかった。細川も述べるように、トゥピ語の語源を世界市民が共有するとき、世界には普遍的な相互理解が生まれる、とする普遍言語への夢が、ここには銜いなく披瀝されている。それは、世界が境界を失いつつあった時代に相応しい言語幻想であり、地球大の移民実験の大義に対する、ある少数派集団の同化の希望に裏打ちされた信条と心情とを集約した、真実なる幻覚だったとは言えまいか。

* Shuhei Hosokawa, "Speaking in the Tongue of the Antipode: Japanese Brazilian Fantasy on the Origin of Language", in Jeffery Lesser, ed., *Searching for Home Abroad, Japanese Brazilian and Transnationalism*, Durham and London: Duke University Press, 2003, pp. 21-45.